第十七章　天愛門でのヤラセ

「台湾に中国軍が侵攻したら台湾にいる邦人をどうやって救出のですか」

国会で総理に総裁選挙に立候補して破れた女性議員がかみつく。

「仮定の話に答えられません」

「アフガニスタンがタリバンの政権下になったとき航空自衛隊機が隣国のパキスタンで待機するだけで結局一人も救出できずに帰国しました。お隣の韓国はすばやく直接アフガニスタンのカブール空港に空軍機を派遣して全員を救出しました」

「戦闘地域に自衛隊を派遣することはできません」

女性議員はそんなことは百も承知だと言わんばかりに総理をにらみつける。

「台湾は中国の一部ですね。そうすると航空自衛隊機を邦人救出のためだと派遣するというのは中国に侵略すると言うことになるのですか？」

しかしここで勢いが落ちる。

「相手の領土に自衛隊機を派遣すると言うことは相手国に了解を得る必要があります」

中国を名指すことを避けた発言だが、総理の言うとおり武装した自衛隊機を派遣するのは困難だろう。

「台湾有事のとき、今からあらゆる事態に備えて準備しておくことが大切だと思いますが、この辺の総理のお考えは如何ですか」

「スピード感を持ってしっかりと対応策を議論していきたいと思っております」

次に野党のある若手非員が質問する。

「台湾在住邦人のことばかり心配していますが、その何十倍もの邦人が中国に滞在しています。中国でコロナウイルスが蔓延したとき民間の大型旅客機が何機もピストン運航して邦人を帰国させました。有事となれば民間機を派遣することはできません。台湾にいる邦人の問題を軽視するわけではありませんが中国にいる邦人の救出の方がもっと困難な問題だと思います。スピード感やしっかり感という問題ではないと思います」

テレビを見ていた田中と大家が声をそろえる。

「なるほど！」

＊

テレビには天愛門事件の映像が流れる。警官や兵士にボコボコにやられて血を流す若者たち。悲鳴を上げて逃げる若者たち。容赦なく髪の毛や腕を引っ張られてして連行される。

「手を上げて抵抗していないのにひどい！」

田中にとって初めて見る映像だった。

「もう三十年以上も前の事件じゃ」

映像が変わって戦車の前に一人の若者が立ちはだかる。
「危ない！」
「これは有名なシーンじゃ。世界中の人たちがこの若者に拍手を送ったものじゃ」
戦車が若者を避けようと左に右に進路を変えるが若者は移動して進路を遮る。両腕を高く上げて「轢いた轢ればいい」と言わんばかりの捨て身の対応をする。
「すごい！」
田中が興奮する。大家も思わず涙を流してつぶやく。
「いつ見ても感動的な場面じゃ」
ここで映像が消えて山本が尋ねる。
「このあとあの若者がどうなったのか、大家さんはご存じですか？」
大家がしばらく考え込む。
「そう言えばこの後この若者がどうなったのか、記憶がないのう。この映像ばかりが流れていた」
「それではこの続きの映像をご覧に入れましょう」
大家が驚くと別の角度から撮影された映像が流れる。
「この映像も先ほどと同じく映像だけで無音です」
「そう言えば戦車の音や周囲でこの光景を見ているであろう市民や学生の悲鳴や同調する声、

逆に警察官や兵士の制止する声や罵倒する声があってもいいのに、無音じゃった」

「その答えはこの映像を見れば分かります」

若者は手にしていた荷物を道路においてつかみ直すと戦車の前から左方向に歩き出す。そして道路脇で待ち構えていた兵士たちの中に紛れ込む。その瞬間がクローズアップされる。拍手でこの若者を迎える兵士たち。そしてこの若者の肩を好意を持ってにこやかに叩く。

「なんじゃ！　これは！」

「ヤラセです」

「なんと！　騙されていたのか」